

国

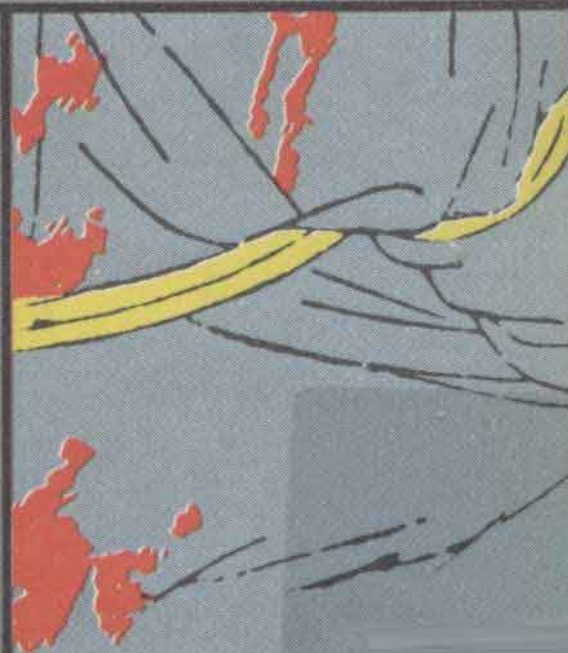
S H I R O

国枝史郎



神^{しん}州^{しゅう} 纈^こ 纈^け 城^{じょう} (下)

伝奇文庫



K U N I E D

文

第六卷

国枝史郎伝奇文庫（六）

しんしゅうこうけつじょう
神州瀨瀨城（下）

昭和五十一年三月十二日第一刷発行
昭和五十一年三月二十二日第二刷発行

著 者 国枝史郎

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二

郵便番号 一一二

電話 東京（〇三）九四五―一一二（大代表）
振替 東京三九三〇

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

© Sue Kunieda 1976 Printed in Japan (文二)

国技史郎伝奇文庫（六）



神州しんしゅう 綴こ綴けつ城じょう
||
下

講談社

横溝正史・半村良・尾崎秀樹

神^{しん}
州^{しゅう}
瀬^せ
瀬^せ
城^{じょう}
(下)

第十一回

一

葛の衣裳を身に纏い、自然木の杖をつき、長い白髯を胸へ垂れた、飄逸洒落な老人と、その侍童の菊丸とが、富士山麓鍵手ヶ原の、直江蔵人の古館へ、一夜のやどりを乞うた晩、同じ館の奥まった部屋で、奇怪な事件が行われていた。

その部屋は二つにわかれていた。

まず前房から説明すると、床が滑石で張り詰められてあり、その天井が非常に高いのが何より目立つ特色で、後房に通ずる戸口には黒色の垂れ布がかけられてあり、中庭に通ずる戸口には厳重な扉が設けられてあった。部屋の四方は板壁で、純白の色に塗られていたが、その一方の板壁に、幾段かの棚が設けられてあり、無数の壺が置かれてあるのもこの部屋の特徴と云わなければならない。いずれも薬品を入れた壺で、壺の表には難解の文字が、紙に書かれて添付されてあった。その薬棚のやや前方、滑石の床の一所に、石で造られた長方形の、寝台のようなものが置かれ

てあったが、これぞ今日の言葉でいえば、気味の悪い外科用の解剖台^{かいぼうだい}なので、既に白布が取りのけられてあるのは、間もなく犠牲者が運ばれるのである。キラキラ輝くメスや鋏^{はさみ}や、小形の鋸^{のこぎり}や金属製の槌^{つち}や、大小数本のピンセットや、白布を入れた銀の手箱などが、その傍^{かたわら}の卓の上に、整然として置かれてあるのも、光景をいよいよ陰惨にする。

後房と向かい合った部屋の隅に、鉄製らしい漆黒の、巨大な火炉が作り付けられてあったが、魔物の口とでも形容したい、カッとひらいた火口^{ほくち}の奥で、真紅の焰がえんえんと燃え、その上に懸^かけられた筒型の釜を、メラメラ嘗^なめている有様^{ありさま}は、決して快いながめではなく、その釜の中の熱湯が、シンシンシンシン音を立てているのが、この部屋の唯一の音であった。

この部屋全体を照らすための、一個大型の龕燈^{がんどう}が、天井から鎖で釣り下げられてあったが、その光は白味を帯び、眊々^{こらこら}という形容詞があてはまるところから考えると、魚油燈でなく獸油燈でなく、化学的のものとされたが、確かなところはわからなかった。

今、部屋には人影がなく、寂しいまでにひっそりとしていた。と、その時、中庭に当たって、人の歩く氣勢^{けいはい}がした。

その時、黒い垂れ布をかかげ、後房から姿を現わしたのは、一人の威厳のある老人であったが、しずかに戸口へ歩み寄ると、門^{かど}を取り扉をあけた。

あけられた戸口からはいつて来たのは、担架^{たんか}を担^{にな}った男達で、解剖台の側まで行くと、つつましくそれを床へ下^{くだ}した。と、老人が合図をした。頷^{うなづ}いた四人の男達は、まず掛けられた白布を匆^はね、その下に寝ていた人間をゆるやかに台へ昇^あぎ載せたが、それから恭^{うやうや}しく一礼すると、再びあけられた戸口から迂^{まが}るように出て行った。後は森然と静かであった。釜で煮え立つ湯の音ばかり

りが、ただシンシンと聞こえている。

解剖台に寝ているのは、正しく活きている人間ではあったが、手もなければ足もない、ズンド切りにした丸太のような、胴ばかりの生物で、その一端が細まりくびれ、そこに一個の隆起物があつたが、云うまでもなく頭部であつた。今、一方の左の眼が、その眼瞼を重々しく開けたが、生命の灯火の消えようとしている、どんよりとしたその白眼が、まず右手へそろそろと動き、さらに左手へ遅々と動いたが、そこで突然閉ざされた。しかし再びその眼瞼が、ブルブルと烈しく痙攣するや、ポツカリ白眼がまたあいたが、今度はそれが上を向き、やがて下の方へ移って行つた。部屋を見廻わしているのであろう。その皮膚の色は銅色を呈し、あちこちから膿が流れていた。顛頂部にある一掴みの髪が、紙のように白く変色しているのも、悪病のさせた業であらう。嘔吐を催させる悪臭が、いつか部屋を立ちこめていたが、脱疽特有の悪臭であつた。

解剖台の横に立ち、患者の様子を見下していたのは、手術衣を纏った老人であつたが、一本のメスを取り上げると、トントんと卓の縁を打った。と、それを合図にして、後房の垂れ衣を左右へひらき、一人の若々しい青年と、一人の乙女とがはいって来たが、つと乙女は卓の側へ行き、青年は棚から銀盆をおろし、火炉の前へ付んだ。

残忍といえは残忍ともいえ、奇怪といえは奇怪ともいえる、人体解剖の行われたのは、実に、その次の瞬間からで、

「眠剤を！」

と老人は厳かに云つた。

「……………」無言で卓の上の香箱を、つと取り上げた美しい乙女は、それを老人の手へ渡した。

香箱を受け取った老人は、やおら箱の蓋を取り去ったが、それを患者の鼻へあてると、しばらく様子を窺った。

二

「よし」というと、蓋を冠せ、卓の方へ押しやった。

やがて「メスを」と老人は云った。と、磨き澄まされた大メスが、乙女の手で渡された。その刃先がブツリと喉仏の下へ刺されたたん、犠牲者の全身を貫いて、波のような痙攣が伝わったが、次の瞬間にはいとも穏かな、絶対の平和が帰って来た。

血が一筋吹き上り、五寸あまりも宙に躍ったのはその痙攣と同時にあったが、しかしそれも一刹那で、乙女の振り撒いた茶褐色の粉が、流れる血汐を凝らせた。

露出された死者の喉から胸、胸から腹まで一文字に、大メスの刃が引かれたのは、手術が二段目へはいった証拠で、切られた切り口から熱い血が左右の脇腹へ滴たり落ちたが、すぐに血止めで凝らされた。

「鋸を！」

と老人は云った。と、乙女の手が卓の上から、それを老人へ手渡した。肋を切り取る無気味の音が、ひとしきり部屋の中へ響いたが、やがて左右十本の肋骨が、血にまみれながら、抜き取られた。その時、老人は左右の手を、物でも捌くように円く曲げ、ドップリと胸腔へ差し込んだが、肘の付け根から爪の先まで、唐紅に血に染めて、それを再び引き出した時には、軟いドロドロした変な物を、掌一杯に捧げて持っていた。

「肺の臓」と冷静に云った。それから青年へ眼をやったが、「銀盆を！」と命ずるように云った。つと進んだ青年は、銀盆に肺臓を受け取ると、そのままゆっくりと旋廻し、爪先で歩いて火炉まで行つたが、筒形の釜の真上の辺で、そろそろと盆を傾むけた。

シンシンという湯鳴りの音が、ひととき音を高めたのは、獲物を一つ呑んだからである。

血の最後の滴りが、盆から釜の中へ落ちるのを見て、青年は盆を手もとへ引いた。それからグルリと振り返った。と、その眼の前に老人が、二つ目の獲物を掌に捧げ、冷静に青年を待っていた。「銀盆を！ 心の臓！」こう老人は云ったものである。

二度高く釜鳴りがし、二度銀盆を胸に抱え、青年が方向を変えた時、三つ目の獲物を掌にのせて、老人が同じように立っていた。

「銀盆を！ 肝の臓！」

ふたたび老人は冷やかに云った。

で、その肝臓も銀の盆から、釜の中へ落とされた。

三度青年が振り返った時、老人は腎臓を掌に載せ、銀の盆を待っていた。四度青年が振り返って見ると、最後の脾臓を捧げながら、やはり銀盆を待っていた。

こうして、悉く人間の五臓が、筒型の釜へ入れられた時、手術は全く終りを告げた。

部屋の中は蒸し熱く、膿の匂いと血の匂いと薬の匂いとで充たされていた。龕燈の光は益々白く、部屋の隅々隈々まで、昼のように明るかった。手術の始まったその時から、その終ったこの今まで、三人のとった行動は、恐ろしいほど冷静で、ちょうど為慣れた組織立った仕事を、法則通りにやる人の、無感激さえ感じられた。

とはいへ、それらの冷静の中には、殺人鬼の持つ惨酷味などは、一点といえども含まれてはいず、むしろそこには科学者だけが持つ、学究的冷酷というようなものが、多分に含まれているのであった。

部屋の片隅に設けられてある、大形の湯槽の栓を抜き、そこからほとばしり出た温湯で、次々に手を洗った三人は、無造作に犠牲者へ白布を掛けると、何んの変事もなかったように、黒い垂れ布を押し分けて、揃って後房へはいって行った。

黒の垂れ布を一つ隔てた、ここ、後房の有様は、陰惨たる前房とは似ても似つかぬ、愉快な華美なものであった。ただし天井の高いのと、床が滑石で張られてあるのとは、前房と変りがなかったが、不気味な火炉も解剖台も、鋭利な器具を立て並べた、小さな卓も置いてはない。

まず中央に紫檀したん細工の丸型のテーブルが据えてあり、それを取り巻いて二脚の牀しょう几と、深張りの一脚の肘掛椅子と、そうしてこれも深張りの長い寝椅子とが置いてあったが、肘掛椅子と寝椅子とに、打ちかけられた豹の皮は、日本産とは思われなかった。

肘掛椅子に腰掛けているのは、解剖のメスを揮ふるったところの、例の威厳のある老人であったが、他ならぬ直江蔵人で、その彼の背後にあたり、それこそ天井に届きそうな、巨大などっしりとした書棚があったが、積み重ねられた書籍の多くは、見慣れない南蛮の書であった。

その老人とテーブルを隔て、寝椅子に並んで腰掛けているのは、例の青年と乙女とであったが、その青年こそ他ならぬ直江主水氏康で、そうして乙女は松虫であった。

仕事の後の快い疲労で、いくらか三人はだるそうに見えたが、しかし愉快そうに話し合っていた。

さまざまの部屋の装飾のうち、壁にかけてある織物が、とりわけ珍らしく立派であった。それには堂塔人物などが、きわめて古風に異国的に、色糸をもって刺繡されてあった。

埃及模様の壁掛けなのである。

馥郁とした芳香が、部屋をふつくと包んでいるのも、花瓶に生けられた花のためではなく、何か化学的の香料が、どこかに置かれてあるからであろう。天井から釣るされた龕燈の灯も、眼を射るような白色ではなく、軟い眠りを催うような、堇のような色であった。

戸外は寂しい秋の夜で、どうやら嵐さえ出たらしいのに、この部屋の内は暖く、今にも音楽でも鳴り出しそうであった。

「信玄公より謙信公が偉い？ ほほう、それはどうしてだな？」

こう云ったのは蔵人で、赫ら顔で長身肥大、雪のように純白な手術衣を纏い、半白の長髪を肩へ垂れた、その風采は神々しかったが、日本的とは云われなかった。

「私にはわからぬ、どうしてだな？」彼はもう一度くりかえした。

「信玄公は戦好き、無名のたたかいをなされます。それに反して謙信公は、終始一貫任侠を旨とし、意義のある戦争をなされます」

こう答えたのは主水であった。今年の晩春越後の国から、この館へ来た頃から見ると、肉も付き血色もよく、健康そうになっていた。おそらくこの土地の風物が、彼の心身に適ったのである。悲観的であった精神まで、楽観的になったらしく、言葉にも動作にも活気があった。

「なるほど」と蔵人はそれを聞くと、穏かな微笑を浮かべたが、「しかし私から云う時は、謙信公も信玄公も、いずれもひとしなみの野蛮人だな」

三

「まあお父様」

と驚いたように、横から声を筒拔かせたのは、美しい乙女の松虫で、「謙信様はわたしどもにとつて、恩ある故主様ではございませんか。ほかに云いようもありましように、野蛮人などと仰せられて……」

「いやいやそういう意味ではない」蔵人はちよつと手を振ったが、

「なにも私は輕蔑をして、そういう言葉を使ったのではないよ。私の持論から割り出すと、今川であれ北条であれ、浅井であれ朝倉であれ、世のいわゆる武人なるものは、一切合切野蛮人なのさ」「それはまたなぜでございますか？」今度は主水が怪訝そうに訊いた。

「なぜというのかな、ほかでもないよ、いき物の世界の法則から見ても、横道へそれているからさ、……由来、人間というものは、人間同志争つてはならぬ。と、こういうのが法則なのだな」

「変な法則でございますことね」松虫が笑いながら突っ込んだ。

「では人間はどんなものと、争いするのでございましょう？」

「そうさな」と蔵人は真面目顔をしたが、「たとえば洪水とか、雷さんとか、火事とか地震とか悪い獣とか、まずザットこんなようなものと、喧嘩をしなければならぬのさ。……おお、そうもう一つある。大事なものを忘れていた。ほかでもない病気だよ」

すると二人の若い男女は、声を揃えて笑い出したが、やがて松虫がからかうように、

「それはお父様が薬師なので、それでそんなことをおっしゃるのでしょ」

「それはそうだよ、いうまでもなくな」依然として蔵人は機嫌よく、「だが私は若い頃には、決して今のようには薬師ではなかった」

「ええええそれは承知しております」こう受け答えたのは直江主水で、「伯父様のご武勇は春日山では、今も評判でございますよ」

「たしか、あれは、二十歳の頃だった」永く忘れていた昔の夢を、思い出そうとでもするように、蔵人はしばらく黙想したが、「家中こぞつて田楽の平へ、兎を狩りに行ったことがあった。もちろん、殿のお供をしてな。……すると大きな熊が出た。いやその大きさというものは、私の体の二倍以上、三倍もあるかと思われたが、不意の狩倉に周章あわてたのであろう。旗本目掛けて駆けて来るではないか。すわや獲物ござんなれと、八方から矢襖やぶすまをつくったが、どうだろう一本も矢が立たない。ポンポンポンン勿ね返すのだ。すると殿が仰せられた——蔵人よ、あれを仕止めろとな。……で、私は走り出たが、さあ思案に余ってしまった。なにしろ征矢そやが立たないのだからな。そこで私は決心し、鎧よろい通しとおを引き抜くとグイと逆手に取り直したものだ。月の輪！ 月の輪！そこを突こうとな」

云い云い蔵人はテーブルの上の、硯箱すずりから毛筆を取り、ムズと逆に握ったが、さすがに勇ましい素振りであった。

「おお浮雲うぐいのうございますこと」松虫は胸を躍らせたが、

「それから何んとなされましたな？」

「うん、苦もなく退治だよ。のしかかって、来る一刹那を飛び違ってたただ一刀、胸から背そびらまで刺し貫いてな」

「お勇しいことでございましたな」感に堪えたように主水は云った。
「が、後がよくなかった」

こう云うと蔵人は懔然^{げんぜん}として、長髪の端をまさぐった。

四

「と云うのは他でもない」やがて蔵人は云いつづけた。

「顔を見たのだ、熊の顔をな！　すると私はゾツとした。なんと熊は笑っているではないか！　そうだ、熊は笑っていたのだ」

見る見る蔵人の眼の中へ、憂愁の色が漂^{ただよ}ったが、

「猛獣などとは思われないほど、本来熊の顔は可愛らしいものだ。しかし熊は死んでいるのだ。罪もないのに殺されたのだ。それなのにその顔が笑っているのだ。あゝと思つた一瞬間、これまでに戦場で首を刎ねた、幾十とも知れぬ敵の首が、ズラリと眼の前に現われたではないか！　そうして皆な笑っているのだ！」

こう云うと蔵人は眼をとじた。

と、主水も松虫も、にわかに鬼気に襲われたかのように、互いに顔を見合せたが、云い合せたように吐息をした。

華やかに見えていた部屋の中を、一筋黒い何者かが掠^{かす}めて通つたように思われた。そうしてそこへだけ大きな穴が、ポツカリ開いたように思われた。

と、蔵人は云いつづけた。

「その時以来、武功というものが、値打ちのないものに思われて来てな。そうして私はこう思うようになった。戦争以来、武功の他に、何かもつと値打ちのあるものが、この世になければならないとな……」

「ああ、それでお父様は、薬師くすりしになられたのでございますね」こう云ったのは松虫であつた。
「まずそうだ。がしかし、それまでになるには尚いろいろ、苦しみもしたし悲しみもした。……だが今はまず平和だ。そうして順境と云つてもいい。……ただお前達二人の者が、私の後を継いでくれたらな」

この時コツコツと主屋に通ずる板扉を打つ音が聞こえて来た。

「おはいり」

と静かに蔵人は云つた。

と、すぐ扉がひらかれて、つつましく姿を現わしたのは、醜いせむし羸せむしの小男であつた。

「小源太か、何か用かな？」

「新入りの患者がございますので」

「ほほう、こんな深夜にな」蔵人はその眼をひそませたが、「で、どんな人物かな？」

「はい、一人は老人で、もう一人は侍童らしゅうございました」

「なんという名か、訊きいたであらうな？」

「はい、常陸の爺おやじだと、ただこのように申されました」

「常陸の爺？ で、病名は？」

「脱疽だつしゅだそうでございます」